

---

# 静かな勇者

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

静かな勇者

### 【Nコード】

N0887BA

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ランスロットは円卓の騎士の中でもとりわけ人格高潔であり冷静だと思われていた。しかしその彼が山賊達に見せたものは。アーサー王伝説の中でとりわけ有名な騎士を書かせてもらいました。

## 第一章

静かな勇者

ランスロットはよくこう言われていた。

「王への忠誠心も篤く物静かで」

「しかも人格は円満で」

「まことに素晴らしい騎士だ」

「完璧な方だ」

アーサー王に仕える円卓の騎士達の中でもだった。

ガウエインと並ぶ最高の騎士とされていた。その彼を見てだ。

若い騎士達もだ。憧れと共に言うのだった。

「あの方の様になれればな」

「ああ、いいな」

「お強いだけでなく忠誠心も凄いな」

「気品もあつて人格者でもあられる」

「何処にも欠点はない」

「あの方みたいになりたいよな」

「本当に理想だよ」

騎士の理想とさえさえていた。彼は決して怒らず誰に対しても公平で思いやりがあつた。それは彼が倒した敵に対しても同じだった。戦場で彼に敗れ槍を手放し落馬した騎士にだ。彼は言った。

「槍を取り馬に乗られよ」

「何っ、殺さないというのか」

「私が戦うのは武器を持つ相手のみ」

だからだ。今はそうしないというのだ。

「さあ、戦われるのなら」

「槍を取り馬に乗り」

「それから致そう」

こう言つてだ。その騎士、落馬し槍を手放した彼を倒そうとはし

なかった。そして領民に対しても公平でありやはり思いやりがあった。彼が怒ったところを見た者はいなかった。

そしてだ。女性に対しても紳士でありだ。全くもって非の打ちどころがないように思われた。その彼にだ。

若い、まだニキビが顔に残る騎士、名前をヴェインという。その彼が問うたのだった。

「ランスロット殿は怒られたことはないのですか？」

「私がか」

「はい。そうしたことは」

あるのかとだ。彼本人に問うたのである。

「おありでしょうか」

「いつも怒っている」

ランスロットはヴェインにこう答えた。この返答はヴェインにとつては意外なものだった。

それでだ。彼は目を丸くさせてだ。ランスロットにすぐに問い返した。

「あの、まさか」

「私とて人間だ」

また言う彼だった。

「怒る時はある」

「しかしそれは」

「見えないか」

「はい、見えません」

その通りだとだ。ヴェインはランスロットに言うのである。

「とてもです」

「そうか。見えないか」

「ランスロット卿が怒られるとは」

見たことがないと言ってだ。そうしてだった。

首を捻りながらだ。また言うヴェインだった。

「そんなことが」

「ではだ」

そのヴェインにだ。ランスロットは言ってきた。

「暫く私と共にいてくれるか」

「ランスロット卿とですか」

「そうすればわかる」

だからだというのだ。

「共にいてくれればな」

「わかりました。それでは」

ヴェインもだ。ランスロットが本当に怒るのかどうかを見たくな  
った。そうしてである。

そのうえでだ。彼と共にいるのだった。

数日共にいた。しかしだった。

やはり彼は常に冷静沈着でだ。そうしてだ。

王や王妃には絶対の忠誠を見せそしてである。

同僚の騎士達にも領民達にも公平で思いやりがある。まさに理想  
の騎士だった。

態度は折り目正しく冷静沈着だ。それを見るとだ。

とてもだった。怒る様には見えなかった。とてもだ。

そういつのを見てだ。ヴェインは食事中にそのランスロットに尋  
ねた。

二人はパンを皿にしてそのうえで手掴みで果物や魚、それに剣で  
切った肉を食べている。これがこの時代の欧州の食事風景だ。

その彼にだ。ヴェインは尋ねた。

## 第二章

「あのですね」

「私のことだな」

「怒られていませんが」

こうだ。ワインを水割りにしたものを壺にそのまま口をつけて飲みながら話す。これもまたこの時代の普通の飲み方である。そうしながらだ。彼に言うのだ。

「全く」

「そうだな。ここ数日はな」

「はい。それでどうして」

「だがもう少しいてくれたらわかると思う」

「もう少しですか」

「そう。もう少しだ」

いればだ。どうかというのだ。

「そうしてくれるか」

「はい、それでは」

ヴェインはランスロットの言葉を素直に受けてだ。そうしてだ。彼を見続けることにした。やがてだ。

彼とランスロットのところだ。ある朝に急報が届いた。それは。「山賊が!？」

「村を」

「はい、そうです」

その通りだとだ。兵士が二人に話す。二人は今ランスロットの城の主の間にいた。そこでこの日これからすることを話していたのである。

「今襲っています」

「それはいけない」

すぐにだ。ランスロットは主の座から立ち上がりだ。

そのうえでだ。ヴェインに対しても言った。

「行こう」

「はい、山賊を退治してですね」

「村人達を救う。いいな」

「わかりました」

ヴェインは強い顔で頷く。だがランスロットは冷静なままだ。それであった。

彼はヴェインを連れてそのうえでその村に向かった。するとだ。村は酷いことになっていた。あちこちから火が出ていた。

そして村人達の死体が転がっている。中には。

「こんな小さな子供まで」

「何ということだ」

ヴェインは馬上からだ。血を流してこと切れている子供を見て蒼白になった。ランスロットはその前で同じく馬に乗っている。

そのうえでだ。それを見て話すのである。

「これでは」

「山賊は一体何処に」

すぐにだ。彼は山賊達の居場所を探した。その為いだ。

生き残っている村人を探してだ。そうしてだった。

小屋の陰に隠れていた老婆を見つけてだ。そうしてだった。

彼女にだ。こう尋ねたのだった。

「山賊達は何処にいる？」

「は、はい」

彼が山賊ではなく騎士だとわかってだ。老婆はまずは安堵した。

そしてだった。そのうえでだった。

ヴェインにだ。こう話すのだった。

「村の中央で村のものや娘達を持って来させてです」

「そこでか」

「宴会をしています」

そうしているというのだ。

「食べ物や酒を奪い。少しでも齒向かうと」

「ああしていたか」

ヴェインは老婆の話聞いてだ。忌々しげにだ。

血の海の中に倒れている子供の骸を思い出してだ。そうして言うのだった。

「何て奴等だ」

「数は多いです」

老婆は山賊のその数も話した。

「五十人はいます」

「数は関係ない」

ヴェインは若さからだ。激情にかられてだ。

老婆にこう告げてだ。そうしてだった。

小屋を出て馬に乗ろうとする。しかしその彼にだ。

ランスロットがだ。こう尋ねたのだった。

### 第三章

「今行くつもりか」

「そうですけれど」

「待て、亡骸を見るとだ」

その小屋の外にもだった。骸があった。中年の女の骸だ。その骸を見てランスロットはヴェインに対して言うのである。

「まだだ。死んで間もない」

「そうなんですか」

「血が完全に地面に滲み込んでいない」

そのことからだ。彼は殺された時間を察したのだ。

そのうえでだ。こうヴェインに話した。

「宴が行われているにしてもだ」

「はじまったところですね」

「今行くのはよくない」

「そうだというのだ。」

「こちらは二人、相手は五十人程だ」

「ですから数は」

「いや、それだけの数だと今行って勝つのは難しい」

あくまでこう言っただ。ヴェインの軽拳を咎めるのである。

そのうえでだ。彼は言うのだった。

「山賊達の宴が進み酒が回ってからだ」

「それからですか」

「山賊達を攻める」

「そうするというのだ。策を使うというのだ。」

「そうしてだった。ランスロットはヴェインにあらためて話した。」

「そうしよう」

「しかしです。村の娘達も捕まっていますし」

「わかっている」

ランスロットはヴェインの激しい言葉に応える。

「しかしだ」

「それならどうして」

「今行っても敗れる」

こう言つてだ。ヴェインの言葉を退けるのである。

「だからだ」

「しかしです」

「そうする」

ランスロットは引かなかった。彼もだ。

「いいな」

「左様ですか」

「今は待つ」

とにかくだ。こうヴェインに言うのである。

そのうえで動かない。その彼を見てだ。

ヴェインは今苦い思いになっていた。ランスロットの考えがわからなかった。しかしだった。

彼の背を見てだ。そこでだった。

その背にだ。あるものを背負っているものに気付いた。それは。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

怒りの炎だった。青く燃えるそれを背負つてだ。あえてそうしていることをだ。見てしまったのである。

そのことに気付いてだ。ヴェインは完全に沈黙したのだった。そしてだ。

夜になりだ。ランスロットはヴェインに対して言った。

「ではだ」

「今からですね」

「そうだ。山賊達を倒す」

夜になってからだ。攻めるといふのだ。

「いいな、山賊達は酔い潰れている」

「そうですね。今は」

「酒にな。そしてだ」

「夜ですね」

「そうだ。その夜だ」

夜にだ。何故攻めるかというところだ。

「夜の闇に紛れて攻める」

「酔い潰れた相手をさらに」

「そうして攻める。いいな」

「わかりました。そこまで考えておられてですか」

「我々は山賊達を絶対に倒し」

そうしなければならぬ。必ずだというのだ。

## 第四章

「そしてだ」

「さらにですね」

「生き残っている村人達も。この村もだ」

「そのどちらもですね」

「救わなければならないからだ」

「だからこそですか」

「待っていた」

ランスロットは言った。

「では攻める」

「今ここで」

こうしてだった。彼等は。

馬に乗り夜の闇からだ。村の中央で宴の末に酔い潰れている彼等を襲ったのだった。

「な、何っ!？」

「何だ!？」

「誰が来たんだ!」

「覚悟しろ!」

「成敗する!」

ランスロットとヴェインはそれぞれ槍を掲げてだ。

馬上から叫びだ。彼等を攻めるのである。

その槍を繰り出し次から次に山賊達を貫きだ。倒していく。相手は五十人といえども酔い潰れ夜の闇に戸惑う彼等は二人の敵ではなかった。

二人は山賊達を瞬く間に倒してだ。村を救ったのだった。

生き残った村人達の感謝の言葉を受けつつだ。二人は村を後にした。それからだ。

ヴェインはアーサー王のいるキャメロットにランスロットと向か

う途中でだ。彼に言ったのだった。

「見させてもらいました」

「何をだ？」

「ランスロット卿をです」

他ならぬだ。彼自身をだというのだ。

「そうさせてもらいました」

「私をか」

「はい、そうです」

そのだ。青い炎をだ。見たというのである。

「そういうことなのですか」

「私とて人間だ」

ランスロットはヴェインが何を言っているのかわかっていた。そのうえでだ。

彼に対してだ。こう答えるのである。

二人は今は緑の道を進んでいる。平原で周囲にあるのは緑の草原、それに赤や白の花々が咲いている。その中を進んでだった。

ランスロットはだ。こう言うのだった。

「怒りもある」

「そうですね。しかしですね」

「それに耐えなければならぬ時もあるのだ」

「そうだというのだ。それがあの時だったのだ。」

「わかってくれたか」

「はい、そのこともまた」

「では行こう」

ランスロットは自分の背を、マントに覆われている背を見ているヴェインに言った。

「王の御前に」

「山賊を退治したことを報告に」

「行くでしょう」

「わかりました」

ヴェインはランスロットのその言葉にすぐに頷いた。そうしてだ。彼の背を見ながら前に進む。今その背は静かな水をたたえていた。

静かな勇者

完

2011・7・30

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0887ba/>

---

静かな勇者

2012年1月2日00時48分発行